

冒頭からお願いで恐縮です：「吉原遊郭」を現在のトルコ風呂(現:ソープランド)の概念を捨てていただきます  
ようお願い致します。

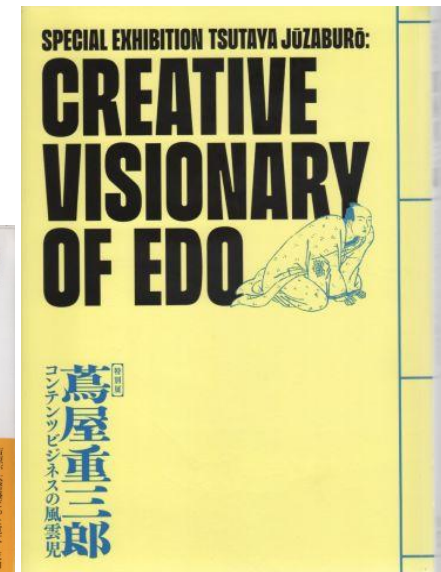
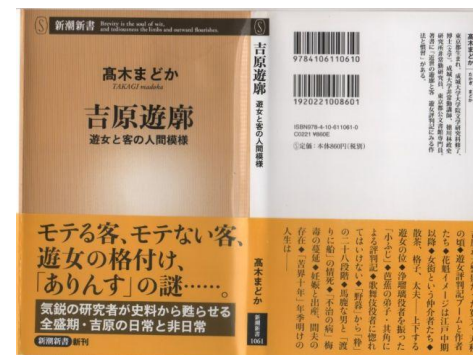
5 テーマでお話させて戴きます。

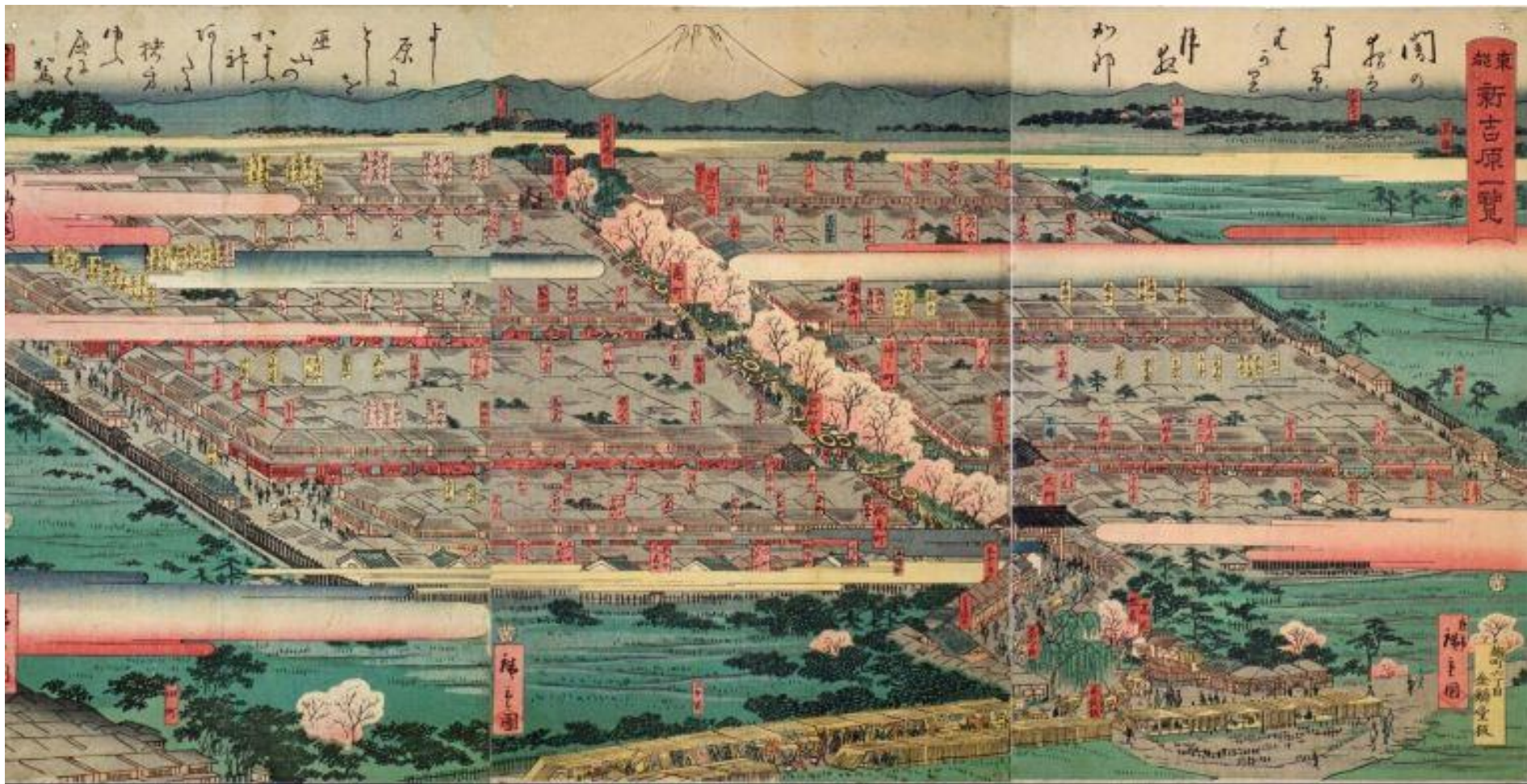
- ①吉原遊郭の歴史とその他との違いについて
- ②「好かれた客」と「嫌われた客」＝役者はなぜ嫌われたのか？
- ③吉原遊郭へ足を運ぶためには・・・事前知識が無いと失敗する。
- ④吉原遊郭の遊び方
- ⑤遊女の日常生活
- ⑥吉原遊郭から生まれた町民文化・・・黄表紙・浮世絵

参考資料

- 1.早稲田大学オープンカレッジ「江戸時代の吉原遊郭と客」資料
- 2.上記講師 高木まどか著「吉原遊郭」遊女と客の人間模様
- 3.特別展 蔦屋重三郎 コンテンツビジネスの風雲児

(2025.6.13 東京国立博物館)





東西：京間180間（約355m）

南北：京間135間（約266m）

\*時代によって変わりますが、その28,500坪余の土地に、遊女3,000人～7.8000人その倍の6,000人～1.2万人が住んでいました。



## 1.吉原遊郭の歴史とその他の違いについて

### 吉原遊郭以前

京都 中世から1392(応永4)年、足利義満が許した九条の里 1589(天正17)年豊臣秀吉が許した二条柳町→1640(寛永17)年「島原遊廓」

経緯 1612(慶長12)年、庄司甚右衛門(1575-1644)が遊廓(売買春公認区域)の設置を望み、後に受理される。

\* 甚右衛門…小田原北条氏の浪人とも、東海道吉原宿の人とも言われ 不明点が多い。

## ❖ 吉原遊廓の設置

### ① 概要

年代 許可＝元和3年(1617)、設置＝元和4年(1618)

\* 江戸幕府樹立は慶長8年(1603)

場所：日本橋(中央区日本橋人形町2-3丁目・日本橋富沢町)

明暦3年(1657)に浅草(台東区千束3-4丁目)へ移転

\* 市街地の開発にともなう幕府命令。

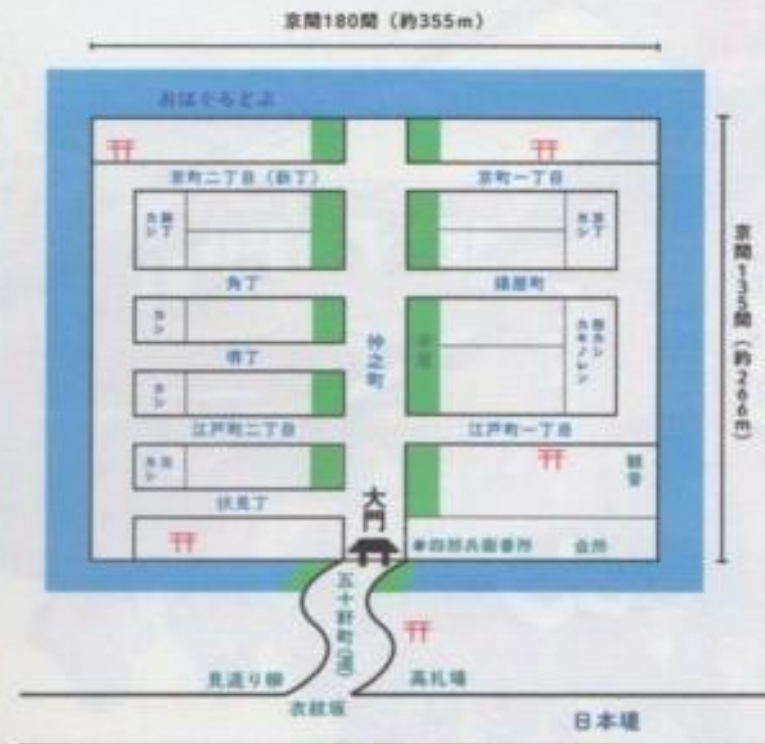
### ② 経緯

慶長17年(1612)、庄司甚右衛門(1575-1644)が遊廓  
(= 買売春公認区域)の設置を望み、後に受理

\* 甚右衛門…小田原北条氏の浪人とも、東海道吉原宿の人ともいわれ、不明な点が多い

### cf. 吉原遊廓以前の状況

京都では中世から応永4年(1392)足利義満が許した九条の里、  
天正17年(1589)豊臣秀吉が許した二条柳町遊廓が存在(二条柳町は寛永17年(1640)以降、島原遊廓と呼ばれるように)。



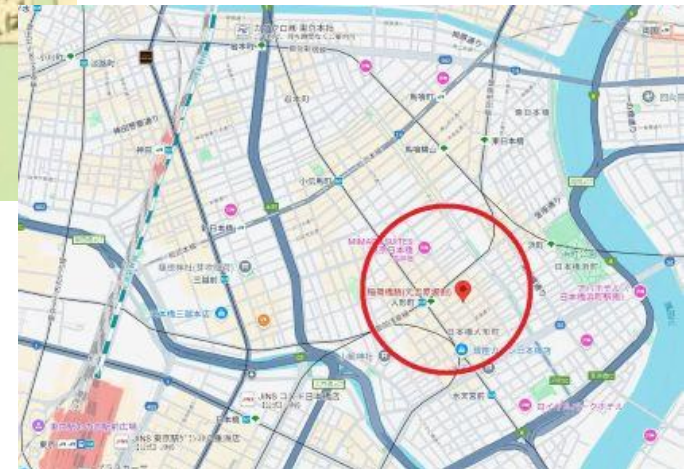
明暦の大火（1657）に日本橋から浅草へ移転(市街地の開発に伴う幕府の命令)



←吉原には歌舞伎座の原点になるような  
役者の演じる場所もあったと記録有り

屋根の付いた小屋になるのは、1700年代に  
なる＝役者の地位の向上か

吉原は、葦が生えている原っぱだったから来るとも 葦原⇒吉原か





吉原遊郭の位置





現在の吉原遊郭跡



### 6代目「見返柳」

京都の島原遊廓の門口にある柳を模した  
後ろ髪を引かれる思いで振り向いでももはや  
吉原を観ることはできない の意  
左の道路が「日本堤」跡

→吉原大門（おおもん）跡



←吉原公園への入り口

湿地帯に造られたので、**盛り土(約1.2m)**をした。その土をすくった後はお堀になり「お歯黒どぶ」と呼ばれました。

階段の向こうに大谷石の土留めが当時の名残があります

右の道路は、**お歯黒どぶ(幅9m)**の名残で、遊廓をぐるりと  
とりまき、遊女が逃げられないようにした。

吉原遊郭への出入り口は大門一か所のみ 門番が居た



この大門手前の道を花魁道中が行われました 沿道には、多くの人が見学していたことでしょう。

## 参考：遊廓とその他の違い

公許	遊廓	遊女を置くことを権力（幕府または藩等）から許された場 *江戸吉原、京都島原、大坂新町など	市街地から離れた場所に所在
非公許	岡場所 (島場所)	許可なく遊女を置き売春を行った場 *江戸の深川、本所、根津など	市街地に散在
準公許	飯盛旅籠	飯盛女（給仕する女性）を抱えることが許された旅籠 *品川・内藤新宿・板橋・千住ほか。飯盛女の売春は許されていなかったが、黙認されていた。	宿場

\* 吉原遊郭は、幕府に何度も「岡場所」の禁止を迫るが実質的に成立せず、そのまま現在のソープランドに繋がります。  
ただ、吉原遊郭への遊女の供給源でもあり、持ちつ持たれつの関係もありました。



江戸前期の吉原遊郭の記録：太夫からメ女郎数まで合計すると **5076人の遊女** が居たことになります。

→ 江戸初期の状況

▼ 芳原細見圖

万治元年（1658）以降（貞享頃か）

太夫	3人
格子	67人
局	365人
讃茶	669人
次女郎	1104人
メ女郎数	2868人
轡屋(遊女屋)	253軒
揚屋	19軒
茶屋(揚屋町方)	18軒

江戸時代は、大きく分けて江戸前期・江戸中期・江戸後期に分かれます。

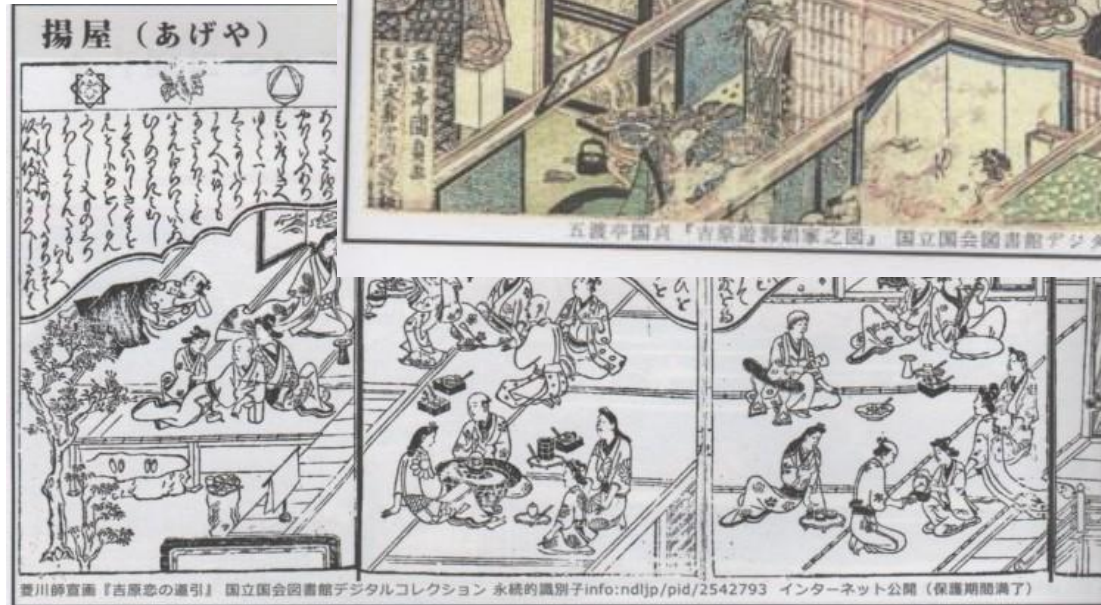
江戸前期 **大名や上流武士のみが出入りできた**。遊女小屋から揚屋(あげや)と呼ばれる建物に歩いて来たのが(花魁)道中の始まり。  
上記遊女の階級は、江戸中期には無くなり、太夫は花魁と名を変えます。 **花魁道中**

江戸中期 **吉原遊郭の低迷期** 非公認の安い遊女小屋である「岡場所」に客を取られる

江戸後期 まさに蔦重の時代。 **吉原遊郭の復活を望み活躍する時代**。江戸の町民文化は、吉原から始まったと言っても過言でない。  
**喜多川歌麿や山東京伝らの描いた「をんな絵」は、ほとんどが吉原遊郭の遊女**であった。



揚屋(あげや)：元々大名や上級武士と言った大身(たいしん)の客をもてなすために豪奢な遊び場…江戸後期には無くなり遊女小屋の二階へ



↑ 揚屋二階の様子(江戸後期)

- ① 酔いつぶれて女性に担がれる客
- ② お料理やお酒を楽しむ客
- ③ 客とお仕事をし終えて身づくろいしながら出てくる遊女などなど

← 揚屋の一階で遊女を待つ様子

## 2.好かれた客 嫌われた客

### ❖はじめに

➤ 客を規定する種々の「法」（≒慣習）

- ・役者衆禁制。瘡掻き(\*梅毒罹患者)御無用（貞享4年1687『吉原源氏五十四君』）
- ・脇人(\*博徒)、役者、くるわの内の者は他の馴染客が伝え聞けば嫌に思う客なのでとるべきでない（寛文7年1667『吉原すゝめ』）

『吉原大全』明和5年(1768) \*吉原遊廓の事跡を記す書

→ 揚屋において役者が客として拒否されたことが知れる

\* 揚屋 = 客が女郎屋(置屋)から遊女を呼んで遊興する店

揚屋は客の要望を聞いて女郎屋から遊女を呼び出し、客と座敷で遊興させた。遊女を呼ぶ際には揚屋差紙という呼出し状を揚屋から女郎屋に遣わすのが習い

…『吉原大全』には揚屋差紙について次のようにある

あげやより女良をよびに遣す節、だれだれといふ女良の名をしるし、末に申楽の類、ならびにかわら者、御法度の客にて御ざなくといふ文言をしたため、女良やへ証文を入れたりとぞ。

⇒ 「申楽」 = 能役者、「かわら者」 = 歌舞伎・浄瑠璃役者が揚屋で禁じられていたことを示す史料と考えられる

### 好かれた客

金払いの良い人・恰好が良い人・しつっこくない人・野暮でない人・大酒飲みでない人…遊女は、客を恋の相手と観ていた

でも、役者は格好は良いが嫌われた客 身分が低く、遊女と同列視されることが嫌だったと言われているが、すべてではない  
実際は、役者と恋仲になった遊女は、たくさんいる。

### 嫌われた客

- ①おやじ 「古いぬる客(老いた客) 人生50年40過ぎるとおやじ。腎虚：賢水（けんすい：精液）が枯渇して体が衰弱した人、しつっこい
- ②座頭 頭を丸めた盲人 遊女の三味線の資料はほとんど座頭「当道座」（とうどうざ）という職能集団ができ、江戸後期高利貸業許可 NHK大河ドラマ「べらぼう」の瀬川(小芝風花)は、この座頭に大金を支払ってもらい吉原遊郭の大門を出ることが出来ました。
- ③役者 千両役者というお金持ちが出てくるのは1700年初頭から、それまでは身分の上がらない期間が長かった。



### 3.遊女の実像

吉原遊郭は 廓言葉(くるわことば)の「ありんす国」と呼ばれました。「ありんす」「なんし」「わっち」「ざんす」等と話されていました

例「わっちは百姓の娘でありんす」「野暮は嫌いでありんす」

遊女が元々使っていた言葉を隠すため(明治半ばまで言語不通：話し言葉が通じない時代でした。

客も天女のようにあこがれて遊女にようやく会えたと思ったら言葉が訛っていては、客の夢を壊しかねません。(京都島原遊廓の考案)

上級遊女になるために 容姿だけでなく筆、三味線、和歌などの知識を身に付けた

**かぶろ** 7-8歳～12-13歳で姉女郎の道中にくっついて歩き、料理を運んだり、手紙を届ける  
字の練習をしたり、三味線のけいこをしり、和歌を詠みました。

**新造** 16-18歳頃には新造(しんぞう)と呼ばれ客と新枕(にいまくら)を交わす「水揚げ」を経て  
正式な遊女となる。

女衞(ぜげん) 娘を親から買い、遊女屋に売る仲介をした者 女見(じょけん)・人置(ひとおき)

山女衞(やまぜげん)：地方を回りをして娘を連れてくる女衞

不法な高利貸をしてその代金として娘を無理やり連れ去る者もいた。

飢饉や災害があった年には、やも得ず娘を売ったり、子供の間引きなどがあった。  
連れて来てもすぐに売らない、貧苦のため痩せているので少しの間美味しいものを  
食べさせ肉ツキと血色を良くして売った。本人も嬉しく良い暮らしができたと思った。  
吉原は、人材不足に悩まされることが多く、上級遊女を除く7～8割は、吉原近郊の  
少女を臨時で雇った「雇かぶろ」の出身が多かった。

遊女のくらは流動的で、位を下げられ、名前を変え、お店を変え別の遊女のように  
務める。原因は、人気落ちる 病で勤めがままならない 年齢を重ねたなど

端女郎→散茶女郎→格子女郎→太夫など 「とんぼかえり」とも言った



↑花魁瀬川の錦絵

右に「かぶろ」左に「新造」が描かれて  
います

#### 4.吉原遊郭へ足を運ぶための予備知識（行き方・慣習など）



- ①平民は「徒歩」で行く
- ②船に乗り今戸橋辺りで下船(贅沢)
- ③馬道通りを馬に乗って行く(身分が高い)
- ④三ノ輪方面から行く

いずれも日本堤は歩くか籠に乗った

←猪牙舟（ちょきふね）    そこが平らで高瀬舟の様    降りやすい様に一部が開いている





奥に馬道通りを馬に乗ったり歩いたりしている人が描かれ、手前に田畑の中を歩く人がある  
三本描かれているのが「見返柳」であろう  
五十間通りは、皆歩いているか籠である。籠も大門前までだった

❖ 日本堤側から吉原を望む



日本堤を籠に乗っていく人、歩いて行く人などが描かれている

茶屋が描かれている辺りは「**どろ町**」(**田町**)と呼ばれ、たらいに水を張り足の泥を落としたことからどろ町と呼ばれました。

「見返柳」付近に茶屋が描かれているがどろ町で「**よそ行きの着物**」に着替えた自宅からだ「え！今日お前、吉原にでも行くのか」などとバレてしまう。





◆ 見返柳・高札場（明治期）



明治4～5年 昇高一里（東京二十六区）見返柳・高札場（明治期）

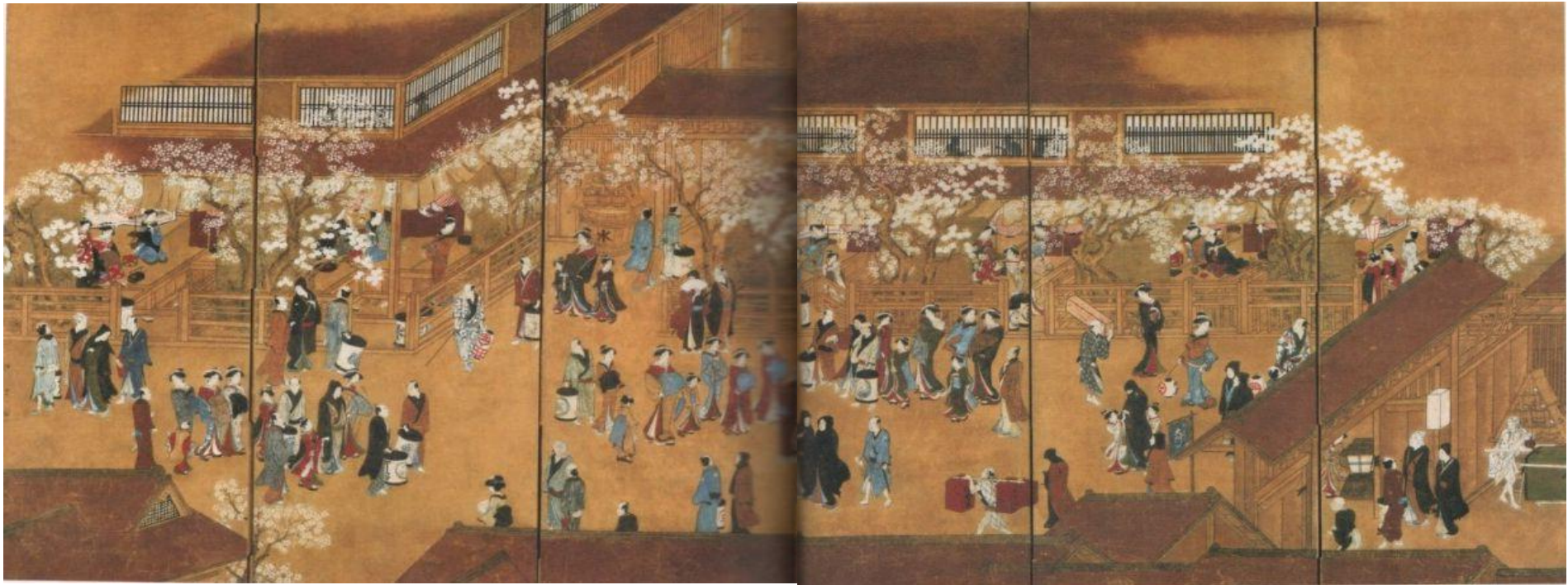
❖ 大門口



大門を入りすぐ右側には最高級茶屋七軒茶屋がありました



## いよいよ大門をくぐり仲之町通りに行く



新吉原春景図屏風 歌川豊春筆 1781～1801年頃(個人蔵)

\* デモンストレーション的な屏風との評価もある

- ①吉原最高級茶屋：七軒茶屋(上部)
- ②仲之町通りと江戸町通りの門 その交差点を描く
- ③中央に花魁道中二組が描かれている
- ④上部左の茶屋の暖簾に巴屋とあるが、実際は手前にあった店

桜の木は、咲くころに植え、咲き終わると移植するという面倒なことをやっていました。

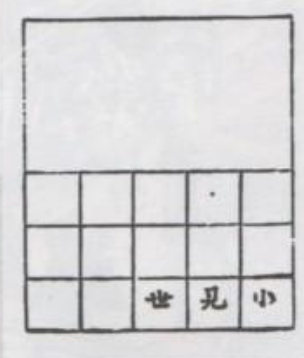
それだけ、**吉原遊郭には「プライド」があった**のでしょう。

「べらぼう」で蔦重と瀬川が「もう一度、吉原を復活させてエンでさ」小芝風花が「そいつあ～ べらぼう だね～」と言ってる

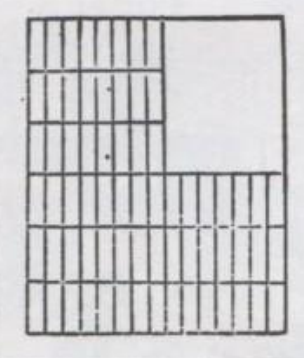


吉原は、見世・籬（まがき）の格好で値段が解りました。

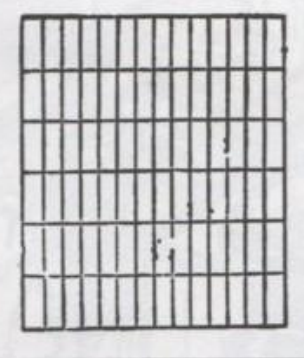
喜田川守貞『守貞漫稿』巻22（嘉永頃）より



小見世（惣半籬）  
下級遊女のみ



中見世（半籬）  
高級＋下級遊女



大見世（惣籬）  
高級遊女のみ

❖江戸中期以降の見世の等級

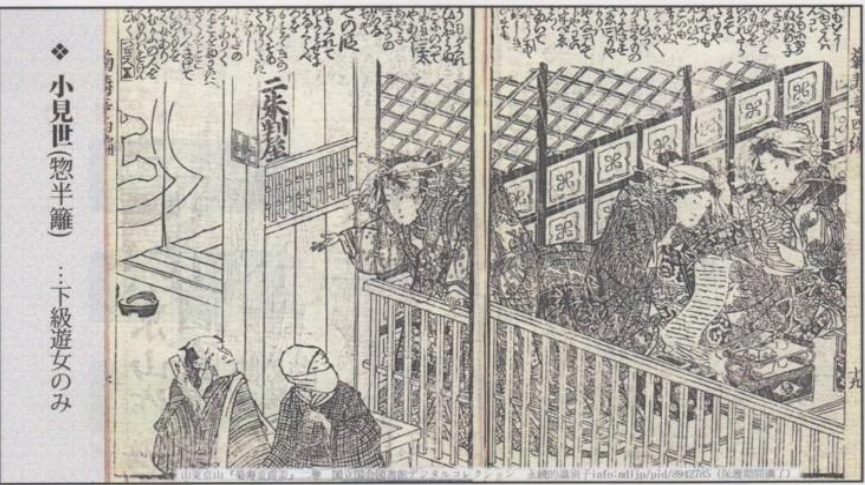
1万円

4～5万円

10万円



「花魁」は自室で待つ。見世には出ない



上記金額に連れ者や  
ご祝儀を合わせると  
10倍くらいか？





❖ 大見世(惣籬)  
…高級遊女のみ



勝川春潮 THE NEW YORK PUBLIC LIBRARY IMAGE ID: 61260488

**昼見世**

九ツ (正午頃) ~  
七ツ (午後4時頃)

**夜見世**

暮六ツ (午後6時)  
~四ツ (午後10時)

※但し2時間の延長が黙認されており、九ツ (12時) になって閉門

吉原遊郭は、日に二回の時間帯がありました

昼見世 九ツ~七ツ (正午~午後四時頃)

夜見世 暮六ツ~四ツ (午後6時~午後10時)

この四時間で、お酒を飲み美味しいお料理を食べ、あこがれの遊女の三味線や歌を聞きながら最後には肌合せができるかもしれないと思う中見世での40~50万円は安くありませんか？

## 5. 吉原での遊び方



**初会** 昼はダメ 夜行くべし 出された料理に手を付けてはダメ 上戸なら酒を飲み笑い声が多いのが良い **床入れ無し**  
次の予約する 忙しそうにして ウキウキ賑やかに笑い声が多いのが良い

**再会** 約束の日を待たず、初会から4～5日空けて太鼓持ちなど案内無し 夕方行くべし 遊女から客の順番を譲ってもらう「もらい」  
をお願いしてみるべし。ダメなら帰るのが良し、もし「もらい」が調べば一宿すべし、今宵こそ **新枕**である

**参会** **馴染み** (本来は江戸中期以降 参会が**新枕**です)



## 2. 吉原での遊び方

### (1) 遊女との参会法

➤ その他、『色道大鏡』にみられる通う際の注意点

・服装など身の回りのもの＝流行にのるべし

月代のすきやう、髪のかんやう、衣裳の模様、袖のゆきかけ、帯・羽織・腰の物に至るまで、善悪はありといへども、大概其はやる時の風義にしたがふ。世上にはやるといふとも、我このまずといひて用いざらんは、道（＝色道）の徒にあらず。

・口中をたしなむ事最上の業也

外を繕ひたりとも、口中無沙汰ならば、色を好むとはいひがたかるべし。

・1人で行かない。太鼓持や友人と行くべし

→局や切見世などの下級遊女以外は、連れがいるのが普通

\*連れなしの遊廓通い＝遊女との真剣な付き合いを思わせる行為

遊女にのめり込み始めると次第に世間を憚り連れをうとむ程「恋のおく山」に入り込んでいく（『色道大鏡』）

遊女も客に真剣な場合は客が連れや太鼓持と共に来ることを嫌がった（『長崎土産』）

…すなわち、遊廓は誰かと同道するのが普通で、一人を通いたがる人は遊女に真剣な人と思われ、周囲から距離をおかれた

房楊枝

月岡芳年『風俗三十二相』

「めがさめさう 弘化年間むすめの風俗」



太鼓持



流行に乗った服装で行くべし

口中を綺麗にして行くべし

一人では行かない太鼓持ちや知人と行くべし 一人で遊んでいる人は、あぶないか遊女と恋仲の人と見なされました

## 2. 吉原での遊び方

### (2) 客同士のつきあい

- 誰かと一緒に通うばあい、気をつけるべきこと  
 遊女との盃→酒宴→床入りにこぎつける  
 …しかし連れがいる際は床入りのタイミングが重要



『山添よし垣』延宝6年(1678)

#### ☆ 酒宴の場でのジレンマ ー床いそぎ

【史料】磯貝舟也・井原西鶴『新吉原つねつね草』元禄2(1689)年

友とするにわるきもの七あり。口舌好む人、二には大よせこのむ人、三には大酒する人、四には諸分しらぬ人、五には床いそぎする人、六には飛過(とびすめ)なる人、七には喧嘩(けんか)このめる人

→①口舌(喧嘩)を好む人、②大寄(大一座)を好む人、③大酒飲み、④諸分(遊廓のしきたりや作法)を知らない人、⑤遊女との床入りをいそぐ人、⑥移り気で浮気な人、⑦喧嘩を好む人

…⑤酒宴の際、客は周囲の様子をうかがいながら遊女との床入りを果たさねばならなかった  
 タイミングが早すぎると「床いそぎ」として嘲笑の的に



遊女屋の表図『吉原遊藝家之図』

「床いそぎ」厳禁

特に連れ立って行く時は、そのタイミングがとても重要だった



## 2. 吉原での遊び方

### (3) 遊女とのつきあい

#### ➤ 遊女とつきあいつづけるには…

馴染み客になると、客は遊女からさまざまな頼み事をされるように

#### ・紋日（もんび）

…五節句と遊廓独特の祝日とを結びつけた日で場代金倍以上。多い月で10日間。客がつかないと遊女は身揚り(自分で自分を買い)するがその値段も倍になったため遊女は必死に客を探した

#### ・妹女郎の新造だしや禿の衣装の面倒（一次スライド）

#### ・心中

…自分の真情を証拠として相手に示すこと。起請文（誓詞）・髪切り・指切り・爪放し・入れ墨・情死など。

…指切り等はふつう遊女が行うが、客からわたす場合も

一年季が明けたあとに引き取るという約束する場合も（例：右）

#### ・身請け

為取申一札之事  
一此度ふしきなる御あん二面  
其御由衛様と二世の御約束  
申候処私年季の儀は  
當年十二月十五日明二  
相成候事実正二御座候  
其節は御由衛様方江  
御ひき取被下候夫まで二  
こゝろいかい御座候らへわ  
御由衛様御存分二可被成候其  
時は親兄弟申二およばづ  
いなや申問敷候其為  
為取申一札仍面如件  
子二月十六日  
きん事  
豊屋  
弥次右衛門様

馴染み客になると客は、遊女からいろんな頼みごとをされるようになる。 新造や「下部路」の衣装などをお願いされた紋日（もんび） 多い月で10日以上客が付かないと遊女は身揚り(自分を自分で買う)してその値段の払った。特別な日は倍額

(右上の遊女の筆をご覧ください。素晴らしいです。こんなにならないと上級遊女に成れなかった)

## 2. 吉原での遊び方

### (3) 遊女とのつきあい

#### ➤ 客に対する私刑

##### ・別の遊女屋で遊んだ客

…別の女郎に会ったのを聞いては「人をつけをき、その客をとらへ、様々打擲いたさるゝ」「あるひは髪をむしり、腕へくいつく」「吉原歌仙」  
…客を大門で待ち受けつかまえ、裸にむき、客の非を糺しても従わなければ振袖を着させたり、顔に墨を塗ったり。非を認めたら仲直りの盃をし、客は祝儀を配る「吉原青楼年中行事」【右上図】 …ほか、髪を切られたりも。

##### ・遊興費が支払えない客

桶伏せ：窓穴のある風呂桶をかぶせ道端に据え辱しめる【右下図】

…江戸初期に廃れた風習だが、江戸時代をつうじてさも行われ続けているように記述される。

例) 高杉晋作

品川の妓楼土蔵相模での支払い滞り＋旅費が必要になる。高杉晋作の父から息子のまさかのときのためにと五十両をあずかっていた穴戸環（ししどたまき）のもとへ井上馨が行き、高杉が金のないために妓楼で「桶伏せ」の処分を受けて居ると嘘をつき、穴戸から金を手にすることに成功。…文久2年（1862）英国公使館焼き討ち事件へ（『世外井上公伝』他）

宮武外骨『私刑類纂』大正12（1923）



お金が支払えない客は、ちょんまげを切られ(その後の生活に多大な影響がある)髪飾りを付け女装させられた。

「桶伏せ（おけぶせ）」と言う風呂桶に窓が開いたもののの中に入れさせられ、街の見世物にされた。



## 6.遊女の日常 「吉原遊郭」遊女と客の人間模様 高木まどか著より

遊女の日というのは大変忙しく、**自由な時間と言うのはほとんどなかった**と言われます。

朝起きたら身支度をし、昼からはひたすら客を待って、客がとおしてつけば、早朝までお相手。陽が昇る前に客を見送った後、わずかな睡眠をとって、また身支度・・・の繰り返し。**合間には簡素な食事をかけこみ**つつ、日々の支出に頭を悩ます時間なんかも必要だったでしょう。

**遊女の休日は**店によって異なりますが、月に一～三日の「**髪洗日（かみあらいび）**」のほか、**年末年始の数日だけ**。

好きな時に休みが取れる「**身揚り（みあがり）**」という手段もありましたが、身揚りは、**主人(楼主)に自分の揚げ代を支払って休みをもらう方法**です。つまり雇先にお金を支払わなければ休めないという、とんでもないブラックな労働環境でした。

**妊娠・出産の間の休業はもちろん、病気での療養期間も、この借金が嵩む方法で遊女たちは、休みをもらっていたのです。**

ほんの一握りの高級遊女は自分の部屋をもち、そこで客を待てますから、客がつくまでの間、好きに過ごすことが出来ました。

そうした部屋を持たない遊女はどうしたかといいますと、「**張見世（はりみせ）**」と呼ばれる、道路に面し、格子(籬：まがきとも)をめぐらした部屋に並んで客を待ちます。つまり、通行者に姿をみせて客となってもらえるようにするわけですね。

当時の絵には、**格子の中で三味線を弾いたり、長煙管（ながきせる）で気怠げに煙草を吸ったりする遊女の姿**が描かれています。

火を吸いつけた煙草を客にさし出す「**吸い付け煙草**」は遊女の情愛の表現とも言われ、それを期待しているらしい客が格子越しに群がっている様子も。吉原には、「**ぞめき**」と呼ばれる冷やかしの客も多く訪れました。

### 古典に和歌に美文字

格子の中で**貝合わせの遊び**をしている様子なども描かれていますが、とりわけ身を引くのは、**読書する遊女たちの姿**です。

遊女たちは、**日常的に文字を書いたり読んだりする必要**がありました。**お客と手紙をやりとりする**のは、毎日こなす大事な仕事だった。

客からの手紙は、筆筒にとっておいて、折々に見返すこともしていた、「このお客さん、久しぶりだけど、前にどんな話したっけ…」

**古典や和歌**も嗜まねばならず、「**手**」(筆跡)の美しさも重視されました。

遊女の読書リストには、もちろん**遊女評判記**も入っていました。

## 写真などで見る吉原遊郭



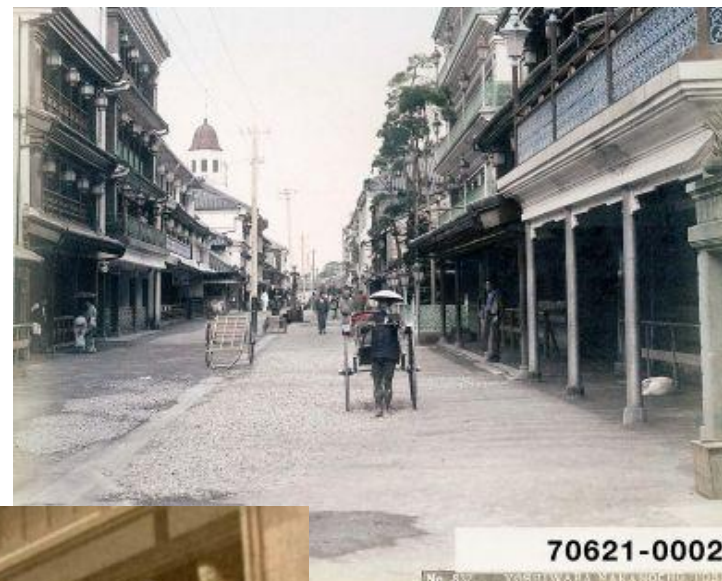
↑ 大正時代の絵葉書より







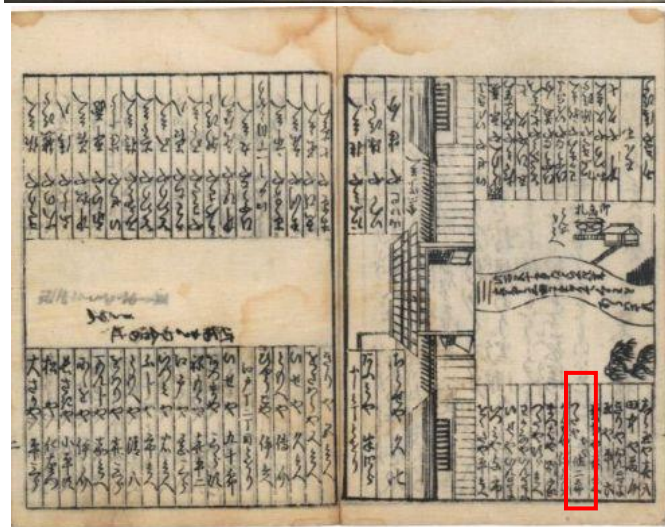
貝合わせをする遊女たち



解体前の吉原遊郭(大正時代)







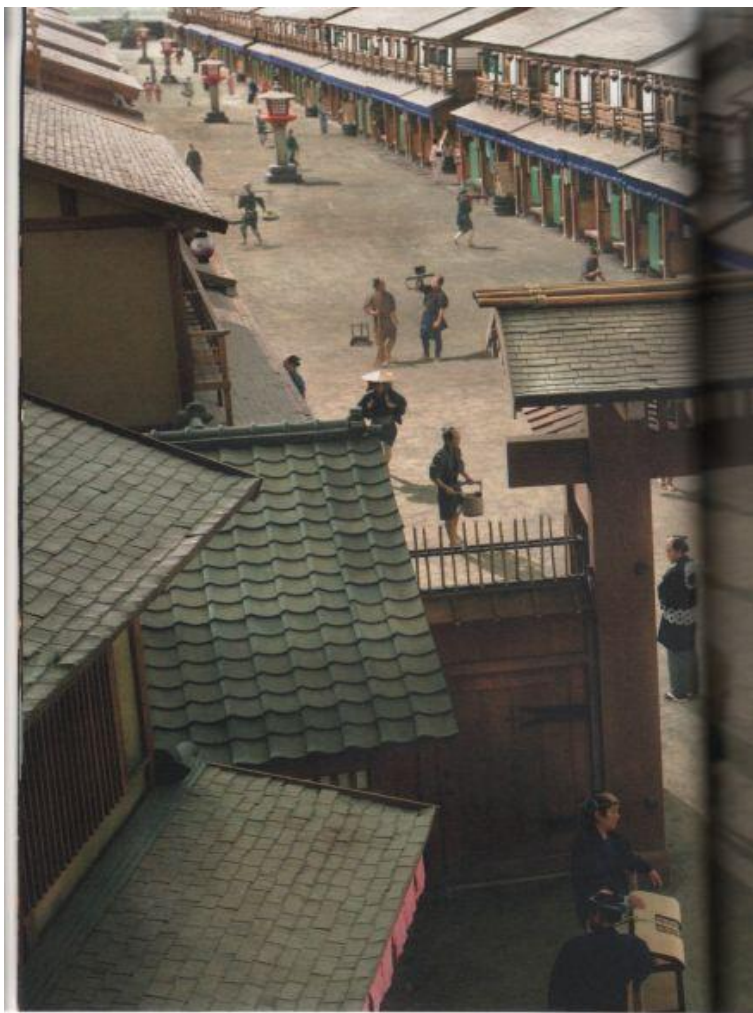
蔦重特別展  
より



←京伝の黄表紙に五十間通りに蔦屋の耕書堂の表記あり







鳶重特別展より



日本橋の耕書堂

## 【編集後記】

「遊廓は、人身売買という今から見れば重大な人権侵害が行われていた場所」高木まどか著 吉原遊郭 より

間違いのない事実であり、そこで働いていた遊女たちは、まさにブラック企業そのものでした。

休みは無く、妊娠や病気になっても身代金を雇い主に献上して休まなければなりません。借金が嵩むため結局は、遊女本人が遊廓から出られる時間が伸びただけでした。 歴史の表に出ることなく(吉原から出ることなく)亡くなった遊女もいた。

一方で、吉原には、客同士のコミュニケーションがあり、遊女の評判を広げたり、身の上話をしたり、そして遊女同志はライバルであり、同じような境遇で「売られて来た」借金の返済のために、悪条件の中で一生懸命に働きました。

蔦重の雇っていた作家は、のちに名を残す方々がとても多く、やがて西洋に流れ、西洋美術に影響を与えました。

国内的にも、やがて世に出てくる漱石や鷗外の小説家の地位を高めることにも繋がります。

歌麿や京伝が描いた女絵は、ほとんど吉原遊郭の遊女たちです。全身の絵から胸から上の絵を描いた歌麿の「大首絵」（おおくびえ）は、当時の人気者になりました。そこには、ちょっとした目配りや表情の変化を読みとったまさに「心画」だったのです（私は、ルノワールなどの印象派と言うべきか？）

吉原遊郭は、文化の中心で江戸人のあこがれの街でした。おびただしい名も無き遊女たちの日々の生活の上に成り立っていたが

**遊女の日々の生活が文化を創り、後世へ多大な影響を与えたといっても過言ではない**と思います。

馬道





← ポツピンを吹く娘 → 姿見七人化粧

喜多川歌麿作





私の好きな小芝風花演じる花魁の姿



←私の一番好きな小芝風花演じる花魁の写真

幼いころから吉原に入り、新造になりやがて花魁に上り詰めた瀬川は、花魁になっても見世に出る必要がなくなっても格子の中で寄りかかり本を読んでいるのです。





↑ 顔部分の拡大

← 夢まくら

喜多川歌麿（1753?～1806）の観察力

歌麿の確かな写生力は、人の表情に遺憾なくあらわされています。

女性の顔は、描かれていないが、男の首をなでるしなやかな手や指の表情が男への愛おしさを強く感じさせている。

一方、女の髪にかかる男の目は冷静で、醒めた目をしている。

男女の織り成す思惑の一瞬が一枚の絵に描き出されている。



葛屋重三郎



山東京伝

←葛飾北斎「夏の朝 鏡見美人」(江戸後期)は、明らかに上記の喜多川歌麿の「姿見七人化粧」の構図を真似ている。ひいては、西洋画フィンセント・ファン・ゴッホやクレード・モネの絵に多大なる影響を与えている。

葛重が絵師の才能を認め、世に知らしめた。そこに描かれているのは、当時江戸の華であった吉原遊郭に住んでいた遊女たちである。その絵は、やがて葛飾北斎に影響を与え、やがて西洋に流れ、ゴッホやモネに愛され西洋画にも影響を与える。

**吉原遊郭は、江戸時代に栄えた町民文化の源であり、その根は遊女たちの日々の生活から生まれ、葛飾北斎を生み、やがて西洋の美術まで動かしていったのです。**